

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：34301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23025

研究課題名（和文）田辺哲学の中期から後期への発展の解明 武内義範との交流を踏まえて

研究課題名（英文）Tanabe Hajime's Philosophical Development between the Middle- and Late- Period: Based on the Exchanges with Takeuchi Yoshinori

研究代表者

浦井 聡 (URAI, Satoshi)

大谷大学・文学部・助教

研究者番号：50844370

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：田辺元の哲学は戦時下の社会存在論「種の論理」における哲学的挫折を経て前大戦末期以降の宗教哲学「懺悔道」へと大きく転回したと言われている。田辺はこの両時期の間の約3年間、自身の思索を自発的に発表しなかった。本研究はこの約3年の「沈黙期」の未公開資料（田辺の手帳・武内義範への書簡）を翻刻することに加え、この前後の田辺のテキストを読解することにより、「種の論理」から「懺悔道」への飛躍の実態を明らかにした。また、武内の浄土の存在論における田辺の社会存在論の図式の継承、および両者の思想的連続性を明らかにした。加えて、海外へ日本哲学を発信するために、海外の研究者と初期田辺の認識論の論考を英訳した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで田辺哲学は十分に研究されてきたとは言いがたく、今なおその思想は解釈の途上にあるため、全体像や哲学的意義は今後の研究を通して明らかにされなければならない。本研究の成果は「種の論理」と「懺悔道」の間の「飛躍」が、従来の研究で強調されてきたように全く別の哲学となったことを意味するのではなく、連続性がかなりの程度保たれていたことを明らかに出来た。これによって従来の理解とは異なる田辺哲学像を示すことが出来た。また、田辺の社会存在論の継承者として武内義範を位置づけることに成功した。加えて、翻刻資料や著作の英訳により、今後の田辺研究、ひいては日本哲学研究発展のための新しい礎を築くことが出来た。

研究成果の概要（英文）：It is often said that Tanabe Hajime's philosophy underwent a major turn following the end of the Fifteen Years' War (1931-1945), a transition from his social ontology known as the "logic of species," which was developed during the war, to a new philosophy of religion known as "metanoetics." Straddling these two periods was a three-year interval in which Tanabe did not release his thoughts to the public. I have clarified the nature of this transition by participating in the publication of documents belonging to this so-called "period of silence" (Tanabe's notebooks and letters to Takeuchi Yoshinori). I have also clarified that the basic scheme of Tanabe's social ontology was inherited by Takeuchi's ontology of the Pure Land, thereby confirming the continuity between their thinking. To raise awareness on Tanabe's philosophy abroad, I have worked with foreign researchers to translate into English Tanabe's early texts on epistemology.

研究分野：哲学

キーワード：田辺元 種の論理 懺悔道 社会存在論 武内義範 将来する浄土

1. 研究開始当初の背景

日本哲学研究では、西田幾多郎の哲学や和辻哲郎の倫理学に関しては盛んに研究が行われてきた。しかし、西田の後継者であり、往時は西田に並ぶ知名度であった田辺元は、京都学派の成立に大きく貢献した重要な人物であるにもかかわらず、あまり研究対象とされてこなかった。研究代表者はこの日本哲学研究の空白を埋めるために、田辺元を研究課題とし、その中でも特に「種の論理」と「懺悔道」のふたつの時期を中心に研究を進めてきた。

従来の田辺研究では、戦時下の国家社会の構造を問題にした「種の論理」と宗教的救済を説く「懺悔道」を別のものとして扱い、「懺悔道」に潜む社会思想の可能性を問うてこなかった。そのため、研究代表者は「懺悔道」に潜在する社会存在論の構造を取り出し、「懺悔道」が田辺自身の救済体験に基づく宗教哲学と、「種の論理」由来の社会哲学の複合態であることを示した。この成果は、田辺哲学を「種の論理」から「懺悔道」を経て最晩年の「死の哲学」に至る一貫した社会哲学として理解する道を拓いた。

とは言え、田辺は「種の論理」から「懺悔道」へとどのように思想を発展させたのか。このことは、「種の論理」と「懺悔道」の間に田辺が著作を公刊しなかった約3年間(沈黙期)があり、公刊資料が少ないことから明らかにされていない。だが、前後の時期のテキスト読解だけでは両時期の間の飛躍の解明には限界がある。そこで、本研究ではテキスト読解の補助材料として、未公刊である群馬大学所蔵の田辺の手帳と、武内義範への書簡に着目した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、田辺が沈黙期に武内と交流する中で親鸞に対する理解を深めて「懺悔道」で展開する宗教哲学の基礎を固めてゆく思索の過程を、「沈黙期」前後の田辺の著作だけでなく「沈黙期」の手帳、及び田辺の武内への書簡を読み解くことで明らかにすることである。

また、本研究は田辺の沈黙期の思索解明にはじめて本格的に着手することに加え、田辺から武内への思想的影響を解明することによって、京都学派の浄土教的宗教哲学の展開に光を当てることができる。田辺と武内は相互影響の下でそれぞれ浄土教の宗教哲学を構築しているため、京都学派が禅的宗教哲学として国内外で受容される傾向にある現在の状況に対し、新たな京都学派像を提示できる。

3. 研究の方法

(1) 「種の論理」と「懺悔道」のテキスト読解

田辺の「懺悔道」は「種の論理」の社会存在論に宗教的根柢を与えるものとして登場する。したがって、「種の論理」から「懺悔道」への連続性は田辺自身によって保証されている。しかし、この側面は『懺悔道としての哲学』(1946年)特にその前半部分の鮮烈な、田辺自身による「新しく生れて来た、哲学ならぬ哲学」という宣言によって見逃されてきた。両時期の哲学的連続性を明らかにするために、「種の論理」と「懺悔道」の緻密な読解によって、何が構造的に保持されており、何が新しい契機として与えられたかを解明する。

(2) 武内の浄土論に内在する「種の論理」の構造の解明

武内義範は田辺の高弟のひとりであり、同時に親鸞研究者として著名である。武内は特にその浄土論の中核概念である「将来する浄土」によって知られている。この「将来する浄土」に結晶する武内の思索は、明らかに田辺の「種の論理」の導きによって為されている。この思索に内在する「種の論理」の図式を、初期武内の著作の精読と「種の論理」との突き合わせによって解明する。

(3) 沈黙期の田辺の手帳と、武内への書簡の翻刻

翻刻経験を積んできた大学院生の協力のもと、沈黙期の田辺の手帳およびその間の武内宛書簡の翻刻を行い、「種の論理」と「懺悔道」の間の「飛躍」の解明の補助とする。

4. 研究成果

(1) 「種の論理」から「懺悔道」への「飛躍」の解明

近代日本哲学研究において田辺元の哲学は十分に研究されてきたとはいえず、今なおその思想は解釈の途上にあるため、全体像や哲学的意義は今後の研究を通して明らかにされていかなければならない。本研究の成果は、「種の論理」と「懺悔道」の間の「飛躍」が、従来の研究において強調されてきたような全く別の哲学となった ということを意味する

のではなく、連続性がかなりの程度保たれていたことを明らかに出来た。このことによって従来の理解とは異なる田辺哲学像を示すことが出来た。

(2) 田辺哲学の全体像の解明

従来、田辺哲学はその目まぐるしく動く思想的見の外見のゆえに各時期に分けて理解され、その思想全体を包括的に理解する視座は与えられて来なかった。研究代表者の博士論文は、「種の論理」から「懺悔道」の間で保たれている思想的連続性だけでなく、田辺の思索の中心には初期から最晩年に至るまで一貫した主題「倫理と宗教の転換媒介」があることを示し得た。本成果が示した田辺哲学の全体像は、今後の田辺研究の共通基盤となるだろう。

(3) 武内の「将来する浄土」概念における「種の論理」継承の解明

従来の浄土真宗の教学研究においても、武内義範に関してはその主著『教行信証の哲学』（1941年）やその中心概念「将来する浄土」はたびたび言及されてきたが、いずれも単発的な言及に留まっていた。本研究における田辺と武内の紐付けにより、武内の「将来する浄土」概念が思想史的にも思想的にも「種の論理」の類・種・個の構造を継承して構築されたものであることが明らかになった。このことによって、「将来する浄土」をその背景・概念構造を踏まえて詳細に明らかにすることが出来た。また、このような視点から、田辺・武内を京都学派における浄土教の宗教哲学として系譜付けることが出来た。

(4) 未公開資料の翻刻

沈黙期の田辺の手帳（特に1943年1月～1944年5月の3冊）およびその間の武内宛書簡の翻刻を行った。この成果により、田辺の沈黙期を解明するための共通基盤を形成することが出来た。

(5) 英語での田辺哲学の発信・国際的研究基盤の形成

海外で日本哲学は西田幾多郎・西谷啓治・上田閑照の禅的宗教哲学、和辻哲郎・九鬼周造の日本文化論が著名であり、田辺元に関しては『懺悔道としての哲学』の英訳を通してごく一部の研究者から言及されるに過ぎない。このような状況を徐々に改善すべく、本研究の成果を特に『懺悔道としての哲学』と結びつけて英語で発信した。また、海外の現象学者と共に、初期田辺の認識論「措定判断について」（1910年）と「明証の所在」（1928年）を英訳し、公表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 浦井聡	4. 巻 66
2. 論文標題 超越をめぐる武内義範の思惟:「将来する浄土」の背景	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 眞宗研究:眞宗連合學會研究紀要	6. 最初と最後の頁 20-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浦井聡	4. 巻 115
2. 論文標題 浄土がある ことをめぐって:田辺元と武内義範を手がかりに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 親鸞教学	6. 最初と最後の頁 22-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 URAI Satoshi	4. 巻 vol.2 No.2
2. 論文標題 “Jinen-honi” from the View Point of Tanabe Hajime 's Philosophy of Religion	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Eastern Buddhist The Third series	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Morten E. Jelby, URAI Satoshi	4. 巻 vol.2
2. 論文標題 [Translation] Tanabe Hajime: “Where self evidence resides”	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Journal of East Asian Philosophy	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s43493-021-00003-8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Morten E. Jelby, URAI Satoshi, Quentin Blaevoet	4. 巻 6
2. 論文標題 [Translation] Tanabe Hajime: "On Thetic Judgment"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 European Journal of Japanese Philosophy	6. 最初と最後の頁 227-240
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 浦井 聡	4. 巻 18
2. 論文標題 『年報第十七号』書評	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西田哲学会年報	6. 最初と最後の頁 120-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 浦井 聡	4. 巻 23
2. 論文標題 九鬼周造記念講演会「偶然に響く言葉の行方」コメント「物語と共同社会」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 心の危機と臨床の知	6. 最初と最後の頁 103-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14990/00004122	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 浦井 聡	4. 巻 -
2. 論文標題 田辺元の宗教哲学:倫理と宗教の転換媒介	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 博士論文	6. 最初と最後の頁 1-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/doctor.k23593	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Urai Satoshi	4. 巻 5
2. 論文標題 Faith and Knowledge in Tanabe Hajime 's Philosophy of Religion	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 European Journal of Japanese Philosophy	6. 最初と最後の頁 5-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浦井聡	4. 巻 37
2. 論文標題 田辺元の宗教哲学における個の行為の性質	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宗教哲学研究	6. 最初と最後の頁 96-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 浦井聡	4. 巻 25
2. 論文標題 田辺哲学における絶対無の変容 横領から救済へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 求真	6. 最初と最後の頁 23-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 URAI Satoshi
2. 発表標題 Mediation and Absolute Mediation in the Philosophy of Tanabe Hajime
3. 学会等名 6th Annual Conference of the European Network of Japanese Philosophy (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浦井 聡
2. 発表標題 京都学派史の中の大谷大学
3. 学会等名 令和三年度 真仏交流会（大谷大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浦井 聡
2. 発表標題 倫理と論理: 「種の論理」における合理化の意義
3. 学会等名 田辺元没後六十周年記念シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 URAI Satoshi
2. 発表標題 Mediation in Tanabe Hajime: Society and Syllogism
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浦井 聡
2. 発表標題 超越をめぐる武内義範の思惟
3. 学会等名 真宗連合学会第67回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浦井 聡
2. 発表標題 日本思想とJapanese Philosophy 近年の日本哲学研究の国際的動向を踏まえて
3. 学会等名 令和二年度 大谷大学真仏交流会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 浦井 聡
2. 発表標題 浄土が ある ことをめぐって 田辺元と武内義範を手がかりに
3. 学会等名 国際シンポジウム 東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係 中・朝・日の思想家たちの証言
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 URAI Satoshi
2. 発表標題 The Relationship between Faith, Reason, and Knowledge in Tanabe Hajime 's Philosophy of Religion
3. 学会等名 International Association for Japanese Philosophy 4th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 浦井聡
2. 発表標題 社会のなかでの救い 田辺元を手がかりに
3. 学会等名 令和元年度 大谷大学真仏交流会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sova Cerda, Satoshi Urai, Miikael-Adam Lotman
2. 発表標題 The Problem of Meaningful Relations in the Kyoto School
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

浦井聡「京都学派史の中の大谷大学」(『響流』第9号、15-16頁、2022年) 浦井聡「私たちは文化の多様性を「理解」できるのか？ 田辺元「種の論理」の視点から」(『響流』第9号、2-3頁、2022年) 浦井聡「日本思想とJapanese Philosophy 近年の日本哲学研究の国際的動向を踏まえて」(『響流』第8号、19-20頁、2021年) 浦井聡「社会のなかでの救い 田辺元を手がかりに」(『響流』第7号、12-13頁、2020年)
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
フランス	フランス国立高等師範学校	ストラスブール大学	